|  |
| --- |
| Full-Scape Wizard |

|  |
| --- |
| 2020年5月10日 |

３章＿青使い編

　村から旅立って５日後、メグルとエデューはイナーボー地方に来ていた。イナーボー地方は最東端の海に面している。

　メグルたちのいる地点と海の間は高台になっており、現在地からは海は望めない。だけども、風に乗る潮の香が海がすぐそばにあると伝えている。

「ここからでも、潮の香がしますね」とメグルがエデューに話しかける。

「そうだな。ここの高台を超えれば、港町はすぐそこだ」

　二人は高台の頂上にたどり着いた。眼下には港町が広がっている。

「港町南東い、真っ白の灯台が見えるか。港町の南東に位置する岬に建っている灯台だ」エデューが指さしながら告げる。メグルがうなずくとエデューは続ける。「あそこに私の弟子だったブーリアンが住んでいる」

「確か、おれの部屋を以前の使っていた人ですよね。今は灯台守なんですか？」

「本職ではないのだが、海が一望できる場所に住みたいとの理由で、敷地内に家を建てさせてもらったらしい。本来の灯台守が動けないときは、代わりに仕事するときもあるようだ」

　エデューは説明を続ける。ブーリアンは３年前から、地元の子供たちに魔法塾を開いている。塾の設備は灯台付近に新しく建築したらしい。本来の灯台守が許しているのか、そんな疑問をメグルは持った。エデューに質問すると、灯台守とは幼少期からの友人で魔法塾も灯台守からのアイデアから始まったとエデューは答えた。そして、その魔法塾でメグルを訓練させる計画だと告げる。

「その話って、ブーリアンさんには伝えているんですか」

「多分大丈夫だろう。あいつも私の弟子だから、言うこと聞いてくれるだろ」

　メグルはこれといった反論はせず、話を終わらせた。

　多分、文句をいうがなんやかんやで兄弟子は受け入れてくれるだろう。そう期待した。

　メグルたちは高台から見えた灯台のある岬を目指し、港町に踏み入れた。宿を物色しながら潮風の香る石畳を進む。

　メグルたちは岬にたどり着いた。２人は馬を繋ぎ、周囲のを見渡す。真っ白の灯台とその右隣には同じく真っ白の石造りの建物ある。灯台から少し左に２件の建物ある。手前の建物には『イナーボー魔法塾』と看板が掛けられていた。

　耳を澄ますと、子供たちの声とそれに混じって男性の声が聞こえてくる。

　エデューがドアをノックする。建物内の音がやみ、ドアから青年が出てきた。

「イナーボー魔法塾のブーリアンです。なんのご用――」言いかけてる時に、相手がエデューであると気づく。「はるばる何の用ですか、エデュー師匠」

「せっかく立ち寄ったので、かつての弟子が元気にしてるかどうか、顔を見に行こうと思ってな。ついでに、一つ頼み事をしたいのだが」

「ついで……ね。どっちがメインの用事なんだか……」

　ブーリアンがメグルに目を移す。

「もしかして、頼み事はその連れについてですか」とブーリアンがエデューに言う。

「察しがいいな」

　「塾を切り上げてくる。少し待っててくれ。細かい話は中でしましょう」ブーリアンはと告げ、塾に戻っていった。しばらくすると子供たちが次々出てきた。

　「中にどうぞ」ブーリアンが戻ってきて二人に告げる。「ようこそ『イナーボー魔法塾』へ」

　魔法塾内にあるブーリアンの仕事部屋で、２人の魔法使いは言い争いをしていた。その内容はメグルを魔法塾に入れるかどうかだ。

「うちの、塾生見たでしょ。うちは児童が対象だ。そいつは年齢的に対象外ですよ」とブーリアンが反対する。

　メグルは先ほど目にした塾生たちを思い出す。確かに、さっき塾の建物から出てきたのはみんな子供だった。

「入塾申請書の条件には、年齢については書いていないぞ」エデューは、手に持った入塾申請書をひらひらさせながら反論する。ちなみに、入塾申請書はブーリアンの机に積まれていた未使用の中からエデューが勝手に一枚拝借したものだ。

　ブーリアンはエデューの手にしている入学申請書の項目を指さす。

「年齢はひとまず良しとしますよ。『保証人』『契約者との関係』はどうするんですか。エデュー師匠」

「もちろん。保証人はエデュー・ジェザーヴィーヌ。契約者との関係は師匠だ」

「ほぼ他人……。そもそも、君はどこの出身？　翻訳魔法をかけているようだけど」ブーリアンはメグルに質問する。

「おれは日本人で、こことは別の世界から来たんだと思います」

　メグルの返答を聞いて、ブーリアンがエデューの耳元のメグルに聞こえないようにささやく。

「あんたが言わせていたり。正気を失っているってわけじゃないよな」

「いいや、彼が言っていることは本当だよ。そんなわけで、彼に身を守る術を教えてやってくれないか」

　ブーリアンが渋々承諾する。「わかった、メグルの入塾を認めよう。明日の10時から開始だ。遅れるなよ」

　イナーボー地方に訪れてから２日目――塾の初日――の朝、メグルはイナーボー魔法塾へ向かっていた。　メグルは塾の戸を開け、自分が場違いなことに気まずさを覚える。

　教室にたどりついたメグルは席は座る。机には個人の荷物は置かれていない、おそらく座席は自由だろう。そう、メグルは判断した。

　塾生たちが次々は入ってくる。彼らも席に着くが、心の距離を表しているのか、２席ほど間隔を開けて座っていく。彼らは互いにおしゃべりをしていたが、しばらくすると皆静かになった。

　ブーリアンが教壇側の扉から入ってきた。

「みんな、おはよう。今日の授業を始める前に新入生の紹介がある。では、自己紹介してくれ」ブーリアンがメグルを指し示す。

「暁メグルです。遠い海の向こうの日本という国からやってきました。小さい島国なので、地図では省略ことが多い国です」

　メグルがこのように説明したしたのは、ブーリアンから『子供たちには異世界から来たことは伏せて、遠い島国から来た』と指示されたからである。

「はいはーい。質問していいですか」一人の少女が手を上げる。

「別に構わないが。それは本当に知りたいことか」ブーリアンが言う。

「お兄ちゃんって何歳？」少女がメグルに質問する

「21歳だけど」

　周囲からざわめく。「大人じゃん」「でも、先生は大人になっても勉強は必要だって言ってたよ」

「ギリギリでストライクゾーンの範囲内ね」少女がほくそ笑む。

「ありがと……う？　年上が好みなんだね」

「でも、いい感じになるまでもう数年かかりそうね」と漏らしながら、ブーリアンにウィンクを贈る。

　少女の反応を見てメグルは理解した。おそらく、ブーリアンの気を引くために質問だろう。そして、ギリギリというのは上限ではなく下限のことだろう。

　その他の質問は出なかったので、ブーリアンは授業を始めた。

「それでは授業を始める。今日の授業は歴史だ」ブーリアンが教壇に立ち説明を始める

　この国では、７年前に戦争があった。今日では『第三次魔法戦争』と呼ばれている。魔法使い複数人で行使する、広範囲を攻撃する魔法や城壁ごと破壊する威力の魔法が多く用いられた戦いであった。

　この戦いにより魔法使いの半数が犠牲になった。停戦後、生き残った上位の魔法使い協議が行われた。そこで『魔法使い反戦協定』が結ばれた。内容を要約すると、魔法使い同士で争いを起こすな、軍事に介入するなといったところだ。

　そして、人を殺めるための魔法の使用は禁止となり、次の世代に教えることも禁止された。

　以上が今回の授業の要約である。

　メグルが魔法塾に通い始めて２日目、メグルは塾の教室でブーリアンの授業を受けていた。

「今日の授業は魔法の属性についてだ」ブーリアンが話始める。「まずは復習から始めよう、すべての属性を答えられる子はいるかな」

　塾生たちが、元気よく手を挙げている。ただ一人メグルを除いては。

「はい。ではメグル君、答えは」ブーリアンが視線をそらしていたメグルを指名する。

「えーと……、木、火、土、金、水ですか？」

「残念、違います。次、シリラさん」

　ブーリアンが銀髪の少女に質問する。

「まずは青。それから赤と白」少し間考えて「そして緑です」

「正解！　ちゃんと復習しているようだね。ここから、新しい内容だ。各属性の役割について説明するぞ。まずは青。これは君たちにすでに教えているものだ」

「打消し魔法！」塾生たちが一斉に言う。

「その通り。先生の得意技でもある打消し魔法が青属性の代表的な呪文だ。その他にはテレパシーなど精神にかかわる魔法も青属性だ。他には翻訳魔法も該当する。総じて魔力や精神そのものに干渉する特徴がある。その反面、直接的な攻撃手段がないのも特徴だ」

　自分の専門分野だから、メグルにはどことなくブーリアンが上機嫌に見えた。

「次は赤属性。この属性は炎や雷を発生させ相手を攻撃するのが得意だ。白属性は防御魔法――光の壁を作ったりするのが有名だな――や身体強化を得意とする。緑属性は自然に作用する属性で動植物を強化して使役したりする」

　ブーリアンが一通りすべての属性を終えた。

一人の少年がおずおずと手を挙げる。

「どうした。ネグラ」ブーリアンが促す。

「先生が話していない、黒って属性あるがあるのは本当ですか」

「本当だよ。黒は戦いに特化した属性で、命そのものを奪うことに焦点を当てている。今となっては『魔法使い反戦協定』によって黒属性そのものが禁止されている。それはそうと、君はどこでそれを知ったんだい？」

「先生から借りた本からです」

「貸した入門書は子供用ものを渡したからそこには黒魔法のことは書いてなかったと思ったんだが」

「入門書じゃなくて一緒に借りた辞書に書いてありました」

「そっちはノーマークだった」

　メグルが魔法塾に通い始めて３日目、教室内の生徒たちが浮足立っている様子だ。

「今日は実技の時間だ、みんな外に出るぞ」ブーリアンが塾生達に呼びかける。

　全員が外に集まる。

「今回が初めての実技になる人はこっち来てくれ、やり方を説明する。他の子たちは各自の魔法組手をしていること。何かあったら、声をかけてくれ」

　メグルと他２人がブーリアンの下に集まる。

「では、打消し魔法について説明しよう。打消し魔法とは、相手が放ってきた魔法に別の魔法をぶつけることによって相手の呪文を無力化する魔法全般を指す。口頭で説明するより、実際に見た方が理解しやすいだろう」訓練中の塾生に呼びかける。「ネグラ君。少し手伝ってくれないか」

　塾生のネグラが呼びかけに応じてこちらにやってきた。

「先生。なんの用ですか」ネグラがブーリアンに訊く。

「打消し魔法を実際に彼らに見せたいので、先生に向かって水を撃ってくれないか」

「はい！」ネグラは返事し、水鉄砲に印と手で形作る。右手の親指を立て、中指から小指を握り、人差し指でブーリアンを指す。まるで、拳銃だなとメグルは思った。

　対するブーリアンは五本の指を開き、水平に構える。こっちは印は扇だとメグルは思った。

「いいですか」ネグラがブーリアンに確認する。

「いいぞ。打ってくれ」

「《スミル・シャガン》」

　ネグラの指先から水が勢いよく発射される。水量はないが勢いがある。例えるなら、ちょっとお値段高めの１リットルペットボトル程度の大きさのタンクがついている水鉄砲と同じくらいの威力だ。

「《ナギ・ゼクー》」ブーリアンがネグラの魔法を吹き消すかのように、手で仰ぐ。

　青白い靄がネグラの魔法と混ざり合い、霧散する。

「これが、打消し魔法。あらゆる魔法を無かったことにする、最良の防御策だ」

「これから君たちにも実践してもらう。メグル君、魔法を使いために必要なものが３つある。なんだか分かるか？」

「印、呪文、魔力です」

「その通り、今回説明する《ナギ・ゼクー》は打消し魔法の中で最も基本的なものだ。印はこのように手を扇状に広げて、相手の呪文に対して動かす」

　メグルたちが、ブーリアンの動きをマネする。

「魔力についてだが、《ナギ・ゼクー》は青属性だ。そのため思い浮かべる風景も青属性に対応した場所を思い浮かべる必要がある。海、川、湖等の水に関する風景だ」

　メグルは旅行中に訪れた、日本一周の旅で訪れた安居渓谷を思い浮かべた。

「そして、呪文は《ナギ・ゼクー》だ。さあ、やってみろ」

「《ナギ・ゼクー》」メグルが手を払いながら呪文を唱える。

　メグルの手元から青白い靄が一瞬だけ出て、すぐに消えた。

「ちゃんと出ているみたいだな。では次、彼の魔法を打ち消してみろ。さっき出た青白い靄を相手の呪文にぶつけるんだ」

　ネグラがメグルに目線で合図を送る。

「《スミル・シャガン》」ネグラの指先から水が発射される。

「《ナギ・ゼクー》」メグルが対応して、打消し魔法を放つ。魔法はメグルの狙い通り相殺する。「やった――」

「《スミル・シャガン》」

　メグルの頬に水しぶきが跳ねる。

「隙あり」ネグラがしたり顔で言う。

「初めてにしては上出来だよ」とブーリアンがフォローを入れる。「もう一度いくぞ」

　そのあとは何度も、打消し魔法の練習を行った。

　メグルが通い始めて４日目の早朝、塾生はまだ誰も来ていない時刻である。ブーリアンは独り塾の扉の前で舌打ちをした。その原因は扉に張り付けられた張り紙の内容だ。

お前の本性を知っているぞ、この人殺しめ。

ガキどもに本当の姿を見せたらどうだ？

　ブーリアンは張り紙を扉から引きはがし、無造作にポケットに突っ込む。

　暇な奴らだ。もっと有意義に過ごせばいいものを。

「ブーリアン先生、おはよう」一番乗りの塾生がやってきた。

　ブーリアン先生。そう、今はただの先生だ。本来の俺がどうだったかなど、この子達は知る必要はない。人を殺めるための魔法は俺たちの世代で終わりにすべきなのだから。

　４日目も打消し魔法の実技でメグル達はみんな外に出ている。

「今日は実戦に近い形での練習だ。うちでは『魔法組手』と呼んでいる」ブーリアンがメグルに説明を始める。「内容は、打消し魔法と水鉄砲魔法を使って、相手に水鉄砲を当てたら勝ち。相手の水鉄砲呪文をいかに最小限の魔法で無効化して、相手の打消し魔法をかいくぐり魔法を当てることが重要になる」

「あの、水鉄砲はまだ習ってないです」とメグルが言う。

「まずはそっちからか」

　ブーリアンが水鉄砲魔法の説明を始める。「印は親指と人差し指を立て、それ除いた３本の指は握る。この時、人差し指を打つ対象に向ける。呪文は《スミル・シャガン》だ。その際に思い浮かべる風景は、水鉄砲と打消しは両方とも青魔法なので、水に関連する場所から魔力を取り出せばいい」

「《スミル・シャガン》」メグルが呪文を唱える。

　指先から水は出たが、勢いが乏しい。水流は重力に引っ張られて、70cm前方の地面を濡らした。

「出ましたけど、これでいいんですか？」

「発動さえしていれば十分だ。あくまで、攻撃魔法の真似として使っているだけだからな。戦闘に使うたぐいの魔法じゃない」

　ブーリアンが近くの塾生に、メグルの組手の相手になるように頼む。メグルと塾生が向き合い、『魔法組手』が始まった。

　相手の水鉄砲魔法に対応して、打消し魔法を放つ。相手の攻撃が止んだタイミングで水鉄砲魔法を放つ。お互いに有効打はない。

「初めてにしては相手の魔法に対する反応が速い。だけど、効率は改善の余地があるな」様子を見ていたブーリアンが指摘する。

「効率？　もっと少ない魔力で打ち消せるってことですか？」

「そういうことだ」

「ですけど、風景だけは十分にあるので魔力切れはほぼ起きないと思いますよ」

「お前の場合なら、問題ない。だが、普通の魔法使いには死活問題なんだ。魔法を使う際のエネルギーはなんだかわかるよな」

「土地から引き出す、ですよね」

「そうだ。同じ土地から、連続で魔法を引き出せないのは知っているな」

「知ってます。でも、その場合は別の土地を利用すれば魔法を使えますし、時間を置くと回復しますよね」

「風景は共有している資源なんだ。誰か一人が湯水のように使いこめば、同じ風景を使っている魔法使いも同様に魔法が使えない状況になる。――とはいっても、お前の故郷の風景はお前の一人だけしか使ってないから、故郷の風景を使う分は問題ないけどな。ただし、こっちの風景を使うときは大切に使えよ」

「分かりました」

　メグルが練習も戻ろうとした時に、ブーリアンが補足を入れる。

「無尽蔵の風景という強みで練度の低さをリカバリーは理にはかなってる。個人的には好きではないがな。だけど、その強みに依存し過ぎないようにしろよ」

　メグルが通い始めて５日目の早朝、この日もブーリアンは張り紙を発見した。場所は昨日と同じく塾の扉だ。だが、内容は変わっていた。

　書かれている内容を本気で行うつもりだとしたら……。

「なんですか？　その張り紙は？」ブーリアンの後ろから声が響く。

　ブーリアンが振り返ると、そこにはメグルが立っていた。

「ああ、メグルか。見ての通り『イナーボ魔法塾』が存在が気に食わないやつがいるらしい」

　メグルは張り紙の内容を確認する。

無視していれば、諦めると思っているのか？

言い出すのが怖いなら、俺たちが手伝ってやるよ

ガキどもの命と天秤にかければ、お前だってもう少し素直になれるだろ。

「これが本当だとしたら、みんなも……」とメグルは言葉を漏らす。

「だから、塾は今日で最後だ。塾生たちが来たら適当に理由をでっちあげて、塾をたたむように説明する」

「張り紙の内容は伝えたくないってことですか」

「そうだ。あいつらの前では先生でいたいんだ」

　２人は塾の中に入っていった。

　教室にブーリアンと塾生皆が集まっている。

「すまない、みんな」ブーリアンが神妙な面持ちで口を開く。「しばらく塾はお休みになる」

　塾生たちがざわめく。

「《機関》から呼び出しがあってな、」ブーリアンが子供たちに説明用に考えた嘘の理由を語る。「しばらくの間は首都で仕事することにな――」

　ブーリアンの言葉が爆発音で遮られる。

　音の方向は塾入り口の扉だ。枠から外れた扉が床に倒れ、粉塵が舞う。粉塵の向こう側には人影が確認できる。

　５人の男が室内に侵入してきた。

　ブーリアンがメグルに目配せをしてから、子供たちを庇うように前に立つ。メグルは集団の最後尾にゆっくり移動する。

　襲撃者の中からリーダーの男が前に出る。

「久しぶりじゃねぇか。ブーリアンさんよぉ」リーダーの男がタンカを切る。

「入塾希望者ですか？」ブーリアンが応える。「残念ながら、しばらく休業する予定なんです。一身上の都合によりましてね」

「まだ、心優しい先生を演じるつもりかよ……。気に入らねぇな」

　リーダーの男はブーリアンに向けて手をかざす。手の形は五本の指すべてを根本からまっすぐ、五角形に配置して相手に向ける形だ。

「《トーモス・イフキ》」男が呪文を唱えると、指の間から火炎が放たれる。

「《ナギ・ゼクー》」ブーリアンが相手の魔法を打ち消す。

「どうした、あの時みたいにやってみろよ。簡単だろ。本性を見せてみろ」

　リーダーの男が火炎魔法の追撃を加える。それに対して、ブーリアンも打消し魔法で応戦する。

「らちが明かねぇ。お前らもブチかませ！」リーダー格の男が叫ぶ。

　ブーリアンに無数の火炎が迫りくる。それぞれに、打消し魔法をぶつけるブーリアン。だが、一つの火炎が打消しを潜り抜ける。

「《ナギ・ゼクー》」塾生の一人であるネグラが放った打消し魔法が火炎をもみ消す。

　他の塾生たちも加勢に加わる。

　塾生たちの加勢によって、防御網の強固になった。だが、ブーリアンは一つの懸念に気が付いた。

「この飽和攻撃相手では、こっちの集中力か魔力が切れた終わりだ……」とブーリアンがこぼす。そして、塾生たちをちらっと見て言葉を続ける。「こちらから、攻撃に転じて一気に方をつける」

「先生って攻撃魔法は使えないはずじゃ……」

「説明は、はぐれ魔法使いどもを片付けるまでお預けだ」ブーリアンが最後にメグルにアイコンタクトをする。「防御は任せたぞ。得意分野で戦え」

　メグルはブーリアンに向かってうなずいた。

「《ナギ・ゼクー》」メグルが打消し魔法を唱える。

　――防御は任せたぞ。得意分野で戦え。無尽蔵の風景。練度の低さ。

　メグルはブーリアンの言葉を思い返す。そして、現状を切り抜ける手段を探す。おれは魔法自体はほぼ無尽蔵だから継続してずっと使い続けることが出来る。でも、相手の攻撃を同時に全て防ぐことは不可能だ。子供たちが今のペースで魔法を使えば、いずれは魔力が枯渇するだろう。だとすると……。

「おれが片っ端から打ち消すから、皆は打消し損ねた魔法の処理だけを頼む」メグルが塾生たちに作戦を話す。

　塾生たちがうなずく。

　寄せては返す波のように、メグルは右手のひらで宙を扇ぐ。青白い靄と赤い炎が混じりあって消えていく。

　思いつく限りの水に関連する場所を片っ端から思い浮かべる。

　打消し漏らした炎がメグルの目の前に迫る。それを塾生の１人であるネグラが打ち消す。

「片手じゃ間に合わない……」メグルは左手も扇の印を組む。

　だが、風景からの魔力の供給が間に合わず、たびたび扇いでも青白い靄が出ない事がある。

　いちいち風景を切り替えている暇はない。だとしたら、映像にすればいい。メグルは海岸沿いの道路をドライブしていた時の眺めを思い出す。移り変わっていく風景。それらは絶えず魔力を供給し続ける。

　両手から、青白い靄が翼状に教室を満たす程に広がる。

　その常識外れな青白い靄に襲撃者たちはたじろぐ。この量の靄を作り出すことが出来るなんて、常識外れな――桁外れな――大量の魔力が必要だ。そもそも、相手の魔法をより少ない魔力で打ち消すのが常識的な――本来の――打消し魔法の使い方だろ。こいつはブーリアンから何を教わってたんだよ。

「あんなのは見掛け倒しだ。すぐに魔力が無くなるはずだ。このまま押しつぶせ」とリーダーがげきを飛ばす。

　ブーリアンは単独で襲撃者たちに歩み寄っていく。

　手刀を構えて、「《ナギ・イナス》」と呪文を唱える。

　彼の両手が青白い光を纏った。左を前に半身に構えて、手の甲で火炎を受け流す。

　一寸たりとも隙も見せず、最小限の身振りと魔力で相手の攻撃を捌く。受け流した攻撃は打ち消されたわけではない、ほんの少し軌道を逸らしただけだ。だが、ブーリアンは振り返らず作戦通り攻撃に移る。

　ブーリアンは襲撃者たちの間に割り込む。ブーリアンを挟んで火炎魔法の射線上に襲撃者たちが重なり合った。

「ほら、やってみろよ」とブーリアンが言う。

　リーダの男が最大出力で火炎を放った。ブーリアンがそれを受け流し、その行先になった手下の1人を火だるまにする。

「この野郎、目にもの見せてやる」とリーダの男が言う。彼は右手で虚空を掴むような印を形作る。より具体的に表現するなら地面から垂直伸びた柱――首を鷲掴みにしていると表現するのが適切だ。

「何をしようとしているのか、お前は知っているはずだ。まだ出し惜しみすんのか？」

　その印が対応している魔法をブーリアンも理解していた。黒魔法の一種である《ホフル・カウシュ》。相手の首を絞めて、文字通り息の根を止める魔法だ。現在では使用が禁止されている魔法の一つである。

　ブーリアンは、右手を固く握る。そして、リーダーに直接触れることの出来る距離まで詰め寄った。

　リーダが口を開く。「《ホフルーー」彼が言い終わる前に、ブーリアンが呪文を唱えた。「《シンギ・ケッカイ》」

　ブーリアンがリーダーの男に眉間に親指を押し付け、鍵を回すように腕をひねる。

　リーダーの男は全身を痙攣させながら、緩慢な動きで動きで仲間の方へ手を伸ばす。

「《トーモス・イフキ》」震えるような声で呪文を口にする。そして、襲撃者の1人が炎に包まれる。

　同じようにまた一人また一人と襲撃者たちが同士討ちしていく。

　塾生のネグラがメグルの服を引っ張って声をかける。

「ねぇ、もう攻撃を止んだよ。でも先生が――」と言っている途中でネグラは、メグルが集中のあまり自分の言葉耳に入ってないことに気が付いた。彼はメグルを思いっきり揺さぶった。

「……終わった……のか？」メグルが我に返る。

「多分ね。先生が相手のリーダーに何か魔法をかけて、そしたら仲間に向かって攻撃して。今は先生がリーダーに何かしようとしてる……」

　メグルは自分が見てくると告げ、ブーリアンのもとに走る。

　メグルは辺りで倒れている襲撃者の下っ端に目を向ける。みんなして大やけどを負ってはいるが生きている。現時点ではブーリアンは誰も殺めてなどいない。

　ブーリアンはどのようにして眼前の男にとどめを刺そうか思案していた。先ほど男にかけた魔法――《シンギ・ケッカイ》――は相手の精神に介入し、操る魔法だ。精神そのもの攻撃は、青魔法だけが使用でき、青魔法の唯一の攻撃手段だ。ブーリアンは男が唱えかけていた《ホフル・カウシュ》で終わらせることにした。

「《ホフル・カウシュ》」リーダーの男は自分自身に黒魔法をかける。

　メグルが二人の元に駆けつけてきた。リーダーの男の蒼白な顔を見てブーリアンに声をかける。

「そいつをどうするんですか」

「始末する。見ての通りだ」

「まだ、誰も死んでない」

「だから？」

「だから……、」メグルはブーリアンが教室で２人だけの時に言っていた言葉を思い出す。

　――あいつらの前では先生でいたいんだ。

「――まだ、ブーリアン『先生』のままです」

　ブーリアンが魔法を解く。

　騒動が解決し、ブーリアン達は襲撃者達をを捕縛した。その後、は子供たちに帰るように指示をした。子供たちが立ち去ってからメグルがブーリアンに問いかける。

「こいつらはどうしますか？」

「そうだな、ガキの目がないうちに――」

　ブーリアンが言い終わらぬうちに、縛られた男たちが岸に打ち上げられた魚のごとくもがき出した。メグルも怪訝にブーリアンを見る。

「――というの冗談だ。とりあえず、エデュー師匠を呼ぼうか」

　メグルは了解し、町までエデューを呼びに行った。

　塾内には襲撃者とブーリアンだけが残る。

「そんな目で見るなよ」ブーリアンが縛られた男たちに言う。「どっちが悪役か分からなくなる。せいぜい、あいつに感謝するんだな」出口の方を顎で示して言葉を続ける。「あいつが俺を説得しなかったら、お前らは生きてないはずだ」

　メグルがエデューを連れて戻ってきた。

「大層な荒事が起きていたみたいだな」とエデューが言う。

「できる限り被害は抑えたと思いますよ」ブーリアンが応える。

　ブーリアンが襲撃者達をどうするかエデューに相談する。ひとまず３人は町の拘置所に襲撃者達を連れて行った。その途中で、ブーリアンはエデューに騒動の一部始終を話した。

「メグルも着実に上達しているようだな。打消し魔法の訓練は切り上げてもよいだろう」とエデューが言う。

「そうだな、明日は卒業式だ」ブーリアンがトーンを落として続ける。「全員のな。今後同じことが起こらないとも限らない」

　襲撃事件が起こった翌日――メグルが通い始めて６日目の朝。

　塾の前で、メグル、ブーリアン、エデューが話していた。

「改めて見てみても、すごいありさまだな」とエデューが言う。

　塾の室内にはガラスや木の破片や瓦礫が散らばっている。

　遠くに岬に上ってくる子供たちが見える。

「本当に、やめるつもりですか？」とメグルがブーリアンに訊く。

　ブーリアンは無言でうなずいた。

　塾までたどりついた子が、おはようと言ってきた。３人もそれに返事をする。

　塾生の１人が塾の室内をのぞき込む。

「危ないから、入るなよ」とブーリアンが声をかける。

　別の塾生の何人かが掃除を掃除用具を持ち出してきた。

「だから、危ないから中に入るなっていってるだろ」とブーリアンが注意する。「当分の間休みなんだ。片付けなくていい」

「休みだから、いつかは戻ってくるんでしょ」

「多分な」

「だから、先生がいつ戻ってきてもいいようにきれいにしないと」

　全員が集まったのを確認してから、ブーリアンは説明を始める。

「すまない、みんな。先日話した、《機関》から呼び出された件は嘘なんだ。本当の理由は、塾をやめるように脅されていたからなんだ」

　そう言って、先日先々日に塾の扉に張られていた張り紙をポケットから出す。

「でも、塾はもうやめるつもりだ。理由は２つ。１つ目は、また昨日と同じようなことが起こることは避けたいし、もしも、そうなってしまったら守り切れる自信が俺にはない。２つ目は、俺にはお前たちに教える資格がない。昨日、メグルが止めていなかったらあいつ等全員を俺は殺していたと思う。かつて、大戦中に何度もやっていたようにな」

　一息つき、声色が暗くならないように気を付けながら話を続ける。

「まだ、魔法を学び続けたいなら。俺がちゃんとした魔法使いに紹介する」

「そんなのやだ。ブーリアン先生がいい」と子供達が反論する。

「また、危ない目に合うぞ」

「次は僕たちが先生を守るから」

「まだ無理だよ」

「うん。まだ無理だから、先生もっと教えてよ」

「俺でいいのか」

「先生・が・いい」

　ブーリアンがメグルとエディーの方を振り返る。

「先生ぶってる姿もしっくりといってますよ」とメグルが言う。「どっちの姿も本物なら自分の好きな方を選べばいいじゃないですか」

「ああ、分かったよ。塾はこれらも続けるよ」

　岬に歓声が沸き上がった。

「そうなると、卒業生はメグルだけになるな」ブーリアンがお手製の証書をメグルに渡す。「卒業おめでとう」

　イナーボから出発し、岬が見える最後の地点でメグルは振り返った。

　旅立つ前に交わした、塾生のネグラと会話を振り返る。

「メグルみたいになるには、どうすればいい？」

「色々場所に行って、定期的に振り返る……かな。本の中身とか人の顔とかはすぐ忘れちゃうけど、景色だけはずっと覚えてるんだ」

「この場所も忘れない？」

「ずっと忘れないよ」

「僕のことは？」

「思い浮かぶ情景の中にみんなもいるから、忘れないよ」